

# 中国における東日本大震災の報道

郭 連友\*

## 1 はじめに

今から5年前、2011年3月11日14時46分、マグニチュード9.0の巨大地震が東日本を襲った。この巨大地震によって引き起こされた大津波は多くの命を奪った。同時に、福島原発もこの巨大地震、大津波により浸水し、大量の放射線が漏洩、建屋の爆発などがあり、多くの住民が余儀なく疎開する事態となった。

この未曾有の大災害を、近隣の中国はどう見守り、どう報道したのか。本報告では、まず、震災発生直後から、CCTV4（中文国際）チャンネルでNHKの番組を中国語に同時通訳し、CCTV4チャンネル『東日本大震災特別番組』の生放送に直接携わった一員として、報道現場の実経験に基づいて、当時中国の東日本大震災の報道状況を報告する。それから、テレビのみならず、各メディアの報道にみられる日本イメージ、中日相互理解のきっかけ、そして、一連の報道が中国社会の日本支援活動に繋がったことなどを報告し、最後に中国における過去の自国の震災報道の問題点や反省点を指摘することにする。

では、まず、私がどうしてCCTV4チャンネル中文国際の「東日本大震災特別番組」に携わったのかについて、若干説明しておく。

1991年4月、東北大学大学院文学研究科博士後期課程に進学し、留学生として、1999年2月まで仙台で約8年間滞在した。留学期間中、日本

思想史を専攻し、幕末の思想家吉田松陰の思想形成における中国との関わりについて研鑽した。普段、翻訳通訳を心がけた私は、ある偶然の機会、仙台地方裁判所、仙台高等裁判所、家庭裁判所、簡易裁判所などで法廷通訳に役に任され、断続的に約5年間この仕事に携わった。この間、法廷通訳の性質から、逐次通訳のみならず、同時通訳の技も磨かれた。

その通訳の貴重な経験や蓄積があったため、帰国後（1999）、中国で、教育者、研究者として大学に勤めながら、中国社会のニーズから、さまざまな領域の通訳の依頼が殺到し、研究者・通訳者の両立を強いられた。中国指導者の日本要人との会見（たとえば、村山富市、海部俊樹、鳩山由紀夫など元首相）、マスメディアの通訳（たとえば、六者協議、温家宝訪日の際の生放送、CCTV人気番組『崔さんのトークショー』『対話』、など）、大型会議の通訳などを数多く経験した。そのような経験や培われたメディア、とりわけCCTV4との協力関係が同時通訳として『東日本大震災特別番組』に携わった所以であった。

## 2 東日本大震災が中国でどのように報道されたのか？

東日本大震災発生直後、中央テレビCCTV4チャンネル（海外向け放送）、CCTV13チャンネル（国内向けニュース）、東方BS放送、フェニックスBS放送などのテレビ局がただちに生放送を開始した。

\*北京外国語大学

大震災発生直後、CCTV ニュースセンターは速やかに緊急シナリオを発動し、いち早く東京駐在特派員を手配し、NHK と調整し、生放送に使用されるシグナルの経路を確保した。同時に、中国地震台網などの関係機関と連携し、続々と大震災について報道した。

CCTV4 の『中国ニュース』は14時04分（日本時間15時04分）から、大震災の第一報を報じた。CCTV13は14時17分から、東京駐在特派員に頻りに電話でライブし、同時にNHKの映像を中国語同時通訳つきで流した（図1）。

CCTV4は地震発生直後、『日本大震災特別番組』を開始した。今回、『特別番組』の報道にあたり、取り入れた形式は、放送スタジオで、キャスター+ゲスト+現場報道（特派員と当事者）であった。生の映像、現場中継、専門家による説明、ライブ電話、ライブ映像、速報ニュース、記者会見、字幕表示放送、3D 動画地図、パネル、

図表などの手段が用いられた。特に同時通訳の形で東日本大震災を大掛かりに報道するのは中国で湾岸戦争以来のことであった（図2）。

筆者は3月12日から23日まで、同時通訳として11日間ほど、CCTV4チャンネル中文国際『東日本大震災特別番組』報道に参加し、NHKの地震関連の映像を生中継の形で中国語に同時通訳した。このような大役はもちろん1人の力でとても対応できないと意識し、同時通訳者3人プラス同時通訳補佐（ボランティアの学生）数名を組んで、この報道に加わった。同時通訳者の3人は朝7時から夜の11時頃まで、三交代の形でスタジオで報道の生放送を担当し、同時通訳補佐のボランティアの学生たちはインターネットで日本の有力メディアウェブサイトのチェック、大震災関連のニュースや情報を収集した。彼らたちが収集した情報は携帯電話でショートメッセージ（SM）などの手段でスタジオの生放送現場にいる同時通訳



図1\*



図2

\* 本論文に掲載された写真はすべて中国メディアのホームページから引用したものである。



2011.3.12 日本福島第一核电站爆炸 核泄漏扩散 >>>原由查看图集 40  
当地时间3月12日，受地震影响，日本福島第一核电站发生爆炸，泄漏的核物质已经扩散到周边地区，核电站1号反应堆的顶盖已经坍塌，外墙体已经出现脱落现象。

図3

者に送られ、生放送同時通訳の参考とされた。また一方、そういった情報はディレクターの判断で放送、テレビの字幕もしくはウェブ掲載の形で活用された。

『特別番組』は、大地震、津波、原発事故などの最新情報、日本社会や政府の動きや対応、緊急対策本部の設置などの救援活動、菅首相や天皇の動き（講話）、枝野官房長官の記者会見、震災および原発事故の中国への影響、また、航空や交通への影響などをリアルタイムに報道した。また、地震や原発に詳しい専門家をスタジオに招き、上記の動きについて深く分析するとともに、如何に日本の教訓を鑑み、今後中国原発の安全性の強化につながるかなどについて考えたり、大震災が中日関係や各方面、たとえば、株式市場、IT業界、産業サプライチェーンなどへの影響についても議論したりした（図3）。

CCTV4チャンネルの『特別番組』の報道は中国社会のみならず、日本滞在の中国人社会でも大きな反響を呼び、大きく注目された。たとえば、番組で日本滞在中の中国人の安否の確認、人探しサービスが字幕の形で提供され、多くの視聴者に利用された。さらに、原発の影響がどれほど深刻なのか詳しい情報が得られず、被害が広がることを懸念し、在日本中国大使館が中国人の引き上げを決定した。引き上げ通知もCCTV4により日本で伝えられ、多くの東北在住の中国人がその情報を受けて、引き上げ行動を取った。

『特別番組』は上記のように中国人社会に情報サービスを提供するだけでなく、中国社会の秩序の安定化、デマ、風評による懸念の払拭などにも役立った。周知のように、大震災発生後、情報源の交錯、報道主体の多様化により、デマ、風

評が発生しやすく、中国社会の安定に悪影響を及ぼし、混乱が起きやすくなる。たとえば、震災発生後の3月15日にインターネットや携帯電話のショートメッセージ（SM）で「日本政府が深刻な放射能漏洩を確認した。アジアの国々が速やかに必要な措置を取るよう呼びかけた。曇や雨の日に外出せず、屋内に留まり、ドアや窓をしっかりと締め、最初の24時間は屋内にとどまること。大気に晒された皮膚は放射能被曝の危険性がある。放射能第一波の埃は本日午後4時にフィリピンに到着する見通しだ」という噂が流された。このBBCからの情報だと自称したメッセージは非常に大きなパニックを引き起こし、人々は相次いでこのメッセージを転送、お互いに知らせた。それで、塩とそれに含まれるヨウ素が放射線に抵抗できるとされ、人々が塩を買いだめする騒ぎがあった。この時、テレビメディアは専門家をゲストとしてスタジオへ招待し、「WHOはヨウ素の使用を慎みたい」として、権威的な知識でデマ、風評、国民の不安を払拭、民心を安定させた（図4）。

また、震災発生後、他のニューメディア、た



図4

例えば、QQ、ウエーボー（中国版 Twitter）、SNS、携帯電話などがテレビメディアと協働し、情報の伝達、心のケア、慰めなどにおいて重要な役割を果たした。

### 3 日本イメージと中日相互理解のきっかけ

中国の大震災報道において、震災以外に特に取り上げられなければならないのは、日本社会の動き、国民の反応、対応についての報道であった。

図5のような写真は中国の各メディアで掲載され、報道された。日本人の大災害を前にして示された冷静さ、落ち着き、秩序正しさなどは中国国民に大きな衝撃を与えた。インターネットで口を揃えて次のように日本国民の素質を賞賛した。

これこそ国民の素質だ。日本は突如としてマグニチュード9.0の巨大地震に見舞われた。日本国民に見舞いを送ると同時に、この天災から多くのことを教えられたといわざるを得ない。（中略）地震直後、サントリーは自動販売機の飲み物をすべて無料で提供、ボタンを押せば、ただで出てくると発表した。日本のセブンイレブンとファミリーマートは無料で食品と飲料水の提供を発表した。図6の写真を見て僕は深く驚いた。（中略）これこそ、国のイメージだ！日本は大きな災害に見舞われたが、世界に手本を示した。仙台の道で避難する人々。被災者は道路真ん中の隔離地帯に集中し、やや込み合っていたが、両側の道路をふさぐことはなかった（図7）。地震発生時のあるスーパーのVTRを見たが、激しい揺れのなかで、スーパー作業服を着た従業員は相変わらず落ち着いて品棚を支え、ずっと揺れが収まるまで、ガラス製品の転落を防いだ。

また、ウエーボーで次のような数百人が広場で避難する風景が多くの人々に伝えられた。その間、タバコを吸う人は1人もいなかった。スタッフが走り回り、あらゆる毛布、お湯、ビスケットを持ち出した。すべての男性が女性を助け、走ってビルに戻り、女性のために必要なものを持ち出した。また、コンセントを出して、ラジオを設置した。3時間後、一時避難が終わり、地上にごみひとつなかった。『ワールドストリートデリー』

中国語版ネット編集長の袁莉さんが次のように記した。「家に帰るも順番に並ぶ。公衆電話を使う際に順番に並ぶ。ごみを捨てる人が見当たらない。この大きな災害の前で、日本人は依然としてマナーを守った。このような民族に感服せざるを得ないさ。彼らのために祈禱する。」（図8）



図5



図6



図7



図8

北京の地方紙『新京報』（3月16日付）は、ある中国人の研修生が震災時に知った日本人の暖かさを報道した。それによると、「宮城県石巻市で被災した浙江省温州市出身の中国人研修生郭玲玲さんは、他の研修生たちと石巻市内の避難所で生活している。避難当初、停電、断水が続き、ほとんどの店も閉まっており、生活に不便を強いられていたが、食事が最も大きな問題であった」という。彼女によれば、当時日本政府からの食料と水の配給が不足してどうにもならなかったとき、瓦礫の中から食べ物を探して食べていた。「崩壊した大きなスーパーの跡で沢山の袋詰めの食品が土砂の中に埋まっていたから、それを掘って、洗って食べた。（中略）地震発生後、日本人も同じようにお腹がすいて、喉が渴いていたはずなのに、私たちに野菜や食品をくれた人がいた。スーパーのスタッフが毎日中国の研修生に無料で食品や水を届けてくださった。日本人であろうと中国人であろうと、平等に配給された」と語った。

新華社通信が中国人研修生20人を津波の被害から助け、自分の命を失った佐藤充さんについて報道した。人民網日本語版はそれを報じた。

人口約1万人の女川町ではおおよそ半数が現在でも行方不明となっている。災害にみまわれたこの小さな町で、100人近くの中国人研修生が難を逃れ、しかも多くの人間が逃げることができたのは現地住民の助けがあったためだ。

災害発生時、大地が揺れ、佐藤水産株式会社の中国人研修生20人は宿舎近くへ避難した。すぐに同社専務の佐藤充さんが走ってきて「津波が来た」と知らせしてくれ、彼女達をより高い所にある神社へと避難させた。研修生を無事避難させた後で佐藤さんは妻子を探すために再び宿舎に駆け戻った。しかし宿舎はすぐに津波に呑み込まれ、佐藤さんが再び姿を見せることはなかった。

災害発生の日々の夜は雪の寒さの中で、研修生たちは行き場がなかった。佐藤さんの兄である佐藤水産社長の佐藤仁さんは家族を失った悲しみを抑えながら、一晩中、山の上の友人宅を訪ねて部屋を借り、研修生たちを避難させた。佐藤水産で普段研修生の管理を担当する杜華さんは「災害発生の翌日、佐藤仁さんが私と初めて会った時の言葉は『杜華さん、20人は全員無事だよ』でした」



図9

女川町佐藤水産株式会社専務  
佐藤充氏



図10

佐藤さんに助けられた中国人研修生

と語っている。

佐藤さんが先ごろ東京の親戚宅で記者の電話取材に答え、「佐藤充さんの妻と娘は無事であった、彼らの家族の安否を気遣っている読者に伝えて欲しいと語った。」（『人民網日本語版』2011年3月21日付）

この報道は中国の各メディアで大きくかつ広く取り上げられ、大きな反響を呼び、中国人がこの謙虚で勇氣ある日本人の愛情にすっかり感動した。

インターネット上では「愛に国境はないことを教えてくれた。感動だ」「中国人に『日本人らしさ』を伝えて下さった佐藤さんは素晴らしい」といった書き込みが相次いでいる。

キャスターの楊蕾さんは「YOU'RE A TOURIST」と書かれたTシャツを着て写っている佐藤さんの写真を見た時、ハッとした。われわれみなツアーリスト、命の旅人だ。佐藤さん、あなたの旅は短いものでしたが、とても輝いていました、と。

ハンドルネーム（以下同）の「一世箏語」氏は今日の新聞でこの話しが紹介された。涙が止まらなかった。それと同時に自分にはとても真似できないと思った。自分だったら恐らく「あっちだから」と指さして、さっさと自分の家族を捜しに行ってしまったと思う。四川大地震の時にもこのような英雄がいた。彼らの魂は永遠に私たちの心

の中で生き続けるだろう。

「落地星星」氏は、人はとっさの時こそ本当の人格が現れるものだと思う。大災害はどの国でも起こり得るもの。国境に関係なく助け合うべきだ。亡くなった日本の方々に哀悼の意を捧げたい。

「月亮与船」氏は何が彼らをそこまでさせるのか？これが日本人の責任感であり使命感なのか。こんな時にも他者への責任を果たそうとするなんて！

「龍猫的向日葵」氏はあのような大災害のなか、自らを犠牲にした英雄たちに敬意を表したい。God bless you and your family！

「新一代的地主」は感動！「どこの国の人」というよりもまずわれわれはみな「人類」だ。佐藤充さんとそのご家族に敬意を表す！

「麦包包麦友团」氏は佐藤充さん、あなたは英雄です！日本、頑張れ！

公務員、梁江涛氏は「佐藤充さんの自己犠牲の精神にとっても感動した。巷で良く言われる『災害を前にした私たちの共通の名前は人類である』という言葉そのものの行動だったといえる。一分一秒を争う肝心な時にこそ、日本人々は外国人の命も同じように守ろうとした。佐藤さんに助けてもらった中国人研修生たちはこのご恩が一生忘れられないだろう。そして、このような非常時にはわだかまりや争いごとを抜きにして、心と心を結び、手と手をつないで互いを思いやり、共に困難を乗り越えることが最も大切なことだと教えられた。われわれは同じ地球村の村民として、日本人たちが1日も早く地震や津波、放射能漏れの恐怖から抜け出し、千年に一度という大災害から復興を遂げることを祈るばかりである」と、書き込んだ。

作家の趙健雄氏も、「今回の震災は当事者にとって生涯忘れられない大惨事となっただけでなく、われわれ中国人にとっても自分たちの隣人を改めて知るきっかけとなった。日本人たちが未曾有の大災害を前に見せた勇気と落ち着き、秩序ある行動と自己犠牲の精神に思わず敬意を抱いた中国人は多い。彼らはその瞬間、中国人をよそ者扱いせず、ただ必死で助けようとした。それは本

能的な行動だったに違いない。実は両国民は草の根レベルではすでに何年も前からとても良い関係を築いてきたのだ。だからこそ、あれほど多くの中国人が日本にいたのだろう。災害そのものは残念なことだが、今回の震災で日中両国民の理解と信頼はより深まったのではないだろうか。自然災害の前に国境はない。みな同じ「人類」だ。大きな災難が今まさに振りかかろうという瞬間、日本人の人間性の素晴らしさが夜空の星のごとくキラキラと光り輝いた」と語った。

「中国網日本語版（チャイナネット）」2011年03月15日付の報道によれば、11日に日本で起きた大地震は日本に重大な損失をもたらし、中国の国民の間でも心配する声が上がっている。中国のあるネットユーザーはこのころ、自ら作詞し、ニュースで流れる災害の映像を利用して特殊なミュージックビデオを制作した。制作者はこのミュージックビデオを通し、地震の被害を受けた日本と中国の雲南省に祈りを捧げ、「愛に国境はない」ことを伝え、隣国に救援の手を差し伸べるよう人々に呼びかけ、被災者に対する深い慰問の意を示した。その歌詞は下記のとおりである。

歌のタイトルは「天災に情なし 人間に愛あり」、作曲は大橋卓弥、歌詞は小珂となっている。歌詞は次のとおりである。

永遠に声を出して話ができない人もいる  
家を失われた人もいる  
人間が生きていくのは容易なことでないだろう  
地震、津波、嵐、それでも秩序を乱さない被災者  
地震に対応する能力を 私たちは見習うべきだろう  
ふるさとは川に変わった  
私たちも経験したことがある  
その悲しい気持ち 今もはっきり覚えてる  
一瞬でなくなった命  
別れを告げる間もなく  
離れていった家族  
汶川と玉樹を振り返ると 多くの出会いや別れがあった  
世界各地から差し伸べられた救援の手で 青空が再び現れる



本のイメージについての報道を通じて、多くの中国人が日本、日本人に対するイメージが変わり、日本への好感を抱くようになり、冷え込んだ中日関係の一時改善のきっかけとなった。

#### 4 終わりに

今回の「大震災特別番組」報道での協力を通じて、幾つかの感想をもつことができた。

まず、中日協力の重要性を新たに認識することができた。報道に関して、まず日本の協力、たとえばNHKの協力がなければ、情報の共有がありえなかった。速やかな報道が災害、被災情報の把握、社会の安定化、救援活動の展開、さらに震災復興につながることは言うまでもない。日本NHKから提供された情報があったからこそ、中国で初めて適確な情報を国民に伝えることができた。また、中国は、日本の報道の内容、仕方などから多くのものを学んだと同時に、災害を前に、われわれはどう対応すべきかななどを色々と教えられた。たとえば、中国原発安全性の問題、耐震建築基準普及の必要性、国民の防災教育（素質教育）重要性、緊急性などの面で多くを学ばせてもらった。また、中国の今までの報道のあり方についての思考と反省が促された。たとえば、大震災の救助現場、メディアの取材や報道は現場の救助活動の妨げになってはならないとか、日本NHKの映像から、被災地では建物は映されるが、被災者（特に死者、負傷者）は映らないなどがあげられる。日本では、人間尊重の立場から、死者が映るショッキングな報道を控えているのに対して、中国の四川大震災の際の報道は余りにも悲惨でショッキングな場面が多くて、NHKの報道の視点は中国のマスメディアの反省の好材料となった。

また、東日本大震災の報道により、両国の国民同士の相互理解が促され、相手の国、相手国の国民に対する感情が些か改善され、中日関係の改善にも役立ったことはこの度の報道の成果として、今後より深く、広く分析し、両国で共有するに値する貴重な財産だと思われる。